

SDGsの視点からの学習活動研究部会 研究活動記録

# 中間報告書 研究編

## 特別支援学校

一般財団法人栃木県連合教育会

令和6年9月

### 3 校種毎の調査結果に基づいた考察【特別支援学校】

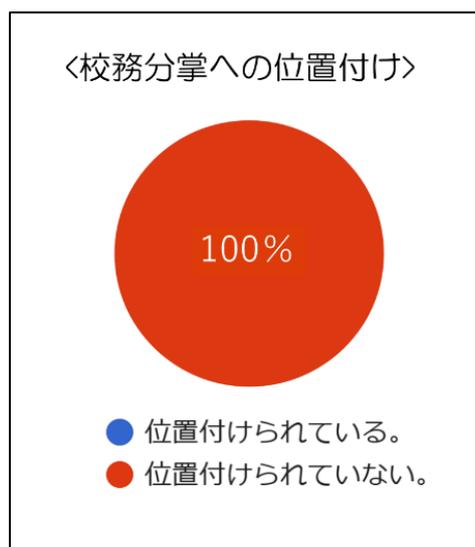
#### 1 学校現場での SDGs の取り組みの現状（学校・教員のアンケート結果から）

＜学校＞設問 4「あなたの学校では、SDGs に関する指導について、校務分掌に位置付けられていますか。」の結果を【図 4-1-1】に示す。アンケートに回答した全ての特別支援学校において、SDGs に関する指導は校務分掌に位置付けられていないということが分かった。

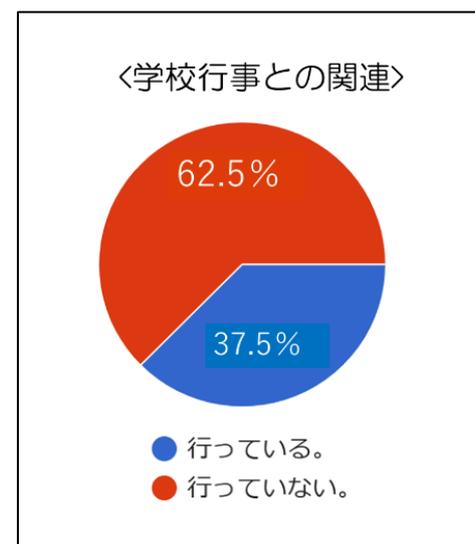
＜学校＞設問 6「SDGs と学校行事を関連させた取り組みを行っていますか。」の結果を【図 4-1-2】に示す。SDGs と学校行事を関連させた取組については 40%弱が実施していると回答した。取り組んでいる行事としては、「給食感謝の会」、「奉仕活動」、「修学旅行」が挙げられた。これらの行事は、アンケートで実施していないと回答した学校以外でも、すでに多くの学校で行われている行事である。したがって、「学校行事と関連させていない」と回答している学校でも、障害種や学部に関わらず、多くの特別支援学校ですで行っている行事と SDGs を関連させて行うことができるということが言える。

＜教員＞設問 4「SDGs を授業で扱っていますか。」の結果を【図 4-1-3】に示す。「扱っていない」と回答した学校の割合が半数以上となった。SDGs について授業で扱ったことがあると回答した教員のうち、＜教員＞設問 5「どの教科、授業で扱っていますか。」の回答結果として、「作業学習」、「生活単元学習」、「総合的な学習（探究）の時間」などが挙げられた。障害種による教育内容の違いはあるが、前述した学校行事と関連させた取組の現状と同様に、教科や領域は、障害種や学部に関わらず、多くの特別支援学校において、すでに取り扱っているものである。よって、「SDGs を授業で扱っていない」と回答した学校や教員も、実際には既存の行事や授業の中でも SDGs に関連した授業を展開できると言える。

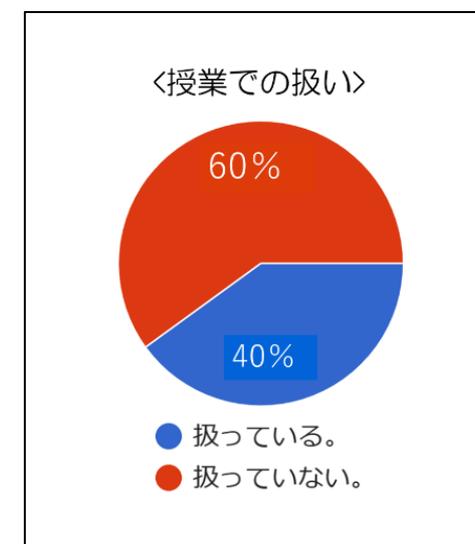
＜教員＞設問 3「SDGs についてどれくらいご存知ですか。」の結果を【図 4-1-4】に示す。この回答からは教員は、自身の SDGs に関する知識や理解の程度が低いことや、SDGs についてある程度理解していても、授業で扱う程の自信はないと感じていることが分かる結果となった。SDGs についての学習を取り扱うことの必要性を感じる一方、取組の困難さや指導の際の不安を感じていることが分かる。学校で取り扱うにあたっての課題点として「児童生徒の実態に即した指導の難しさ」や「教員の SDGs に関する意識を高めることや正しい知識をもつこと」、「教材の充実」などが挙げられた。



【図 4-1-1】



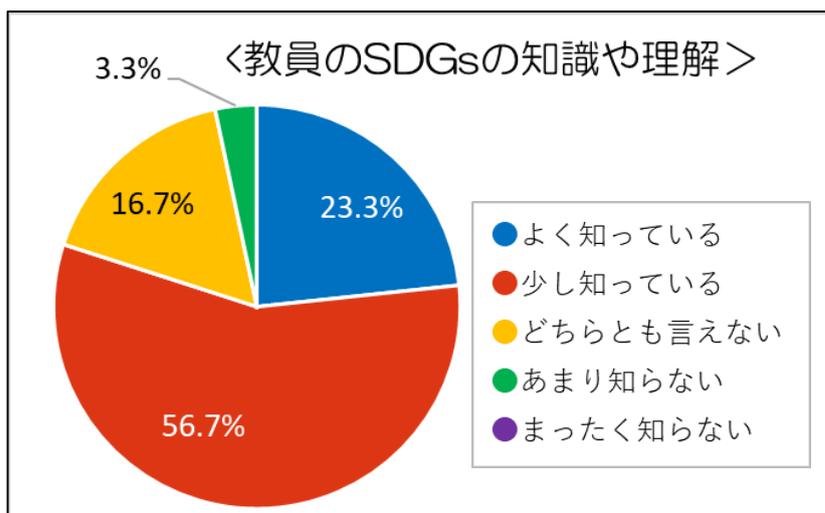
【図 4-1-2】



【図 4-1-3】

### 3 校種毎の調査結果に基づいた考察【特別支援学校】

以上のことから、教員が SDGs について正しい知識と高い意識をもつことや SDGs と関連付けた授業の実践例や教材を充実させることで、すでにそれぞれの特別支援学校で行っている学校行事や授業の中でも SDGs に関する学習を扱うことができると言えるのではないだろうか。

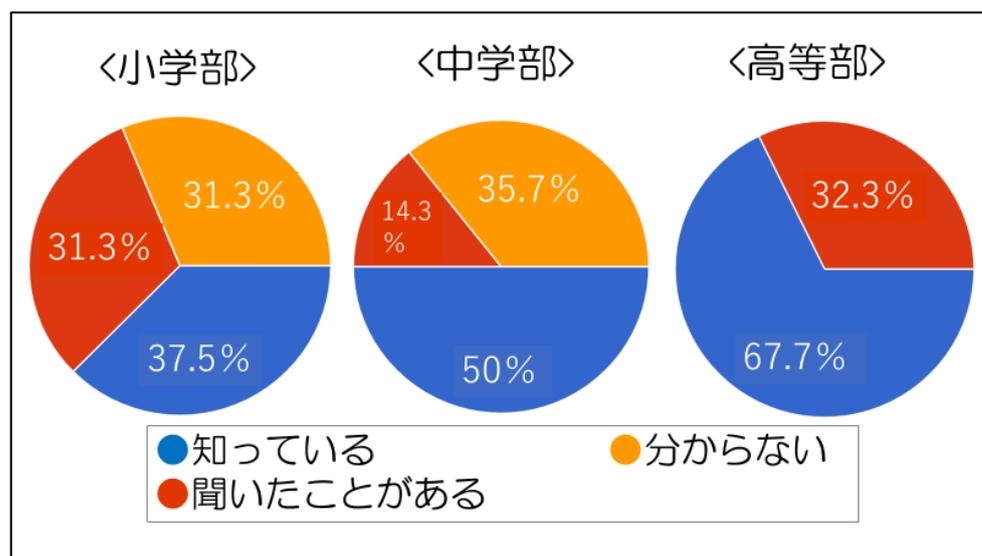


【図 4-1-4】

## 2 児童・生徒の SDGs の意識（児童・生徒のアンケート結果から）

特別支援学校には、視覚障害者、聴覚障害者、肢体不自由者又は病弱者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校（以下、「特別支援学校（視聴肢病）」とする）と知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校（以下、「特別支援学校（知的）」とする）がある。また、小学部から高等部まで設置されている学校が多いため、それぞれの障害種や学部ごとの比較という視点でアンケートを考察してみる。

SDGs という言葉については、いずれの障害種の小学部、中学部、高等部ともに6割以上が「知っている」または「聞いたことがある」と回答した。その結果を【図 4-2-1】に示す。教員が SDGs を授業内で取り扱っているという意識が低いにも関わらず、児童生徒は SDGs という言葉を聞いたこと



【図 4-2-1】

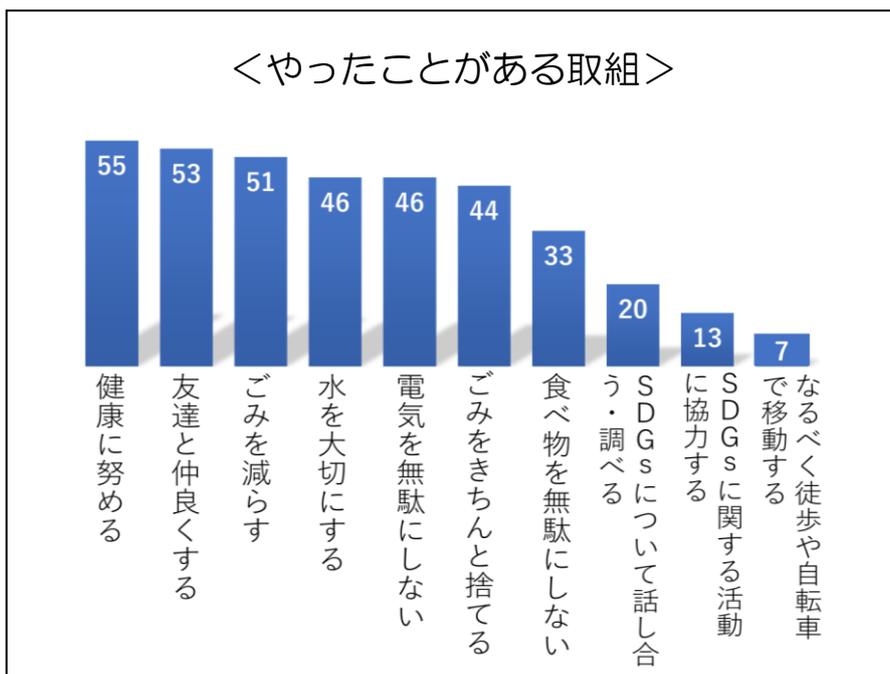
がある割合が高くなっている。また、アンケートに回答した児童生徒全員が何らかの SDGs に関する活動に通り組んだことと答えている。

＜児童・生徒＞設問3「SDGs の取り組みで、あなたがやったことがあるものはどれですか。」の結果を【図 4-2-2】に示す。取組の内容としては、「健康に努める」、「友達と仲良くする」、「ごみを減らす」などの生活に身近な活動や、毎日繰り返し行っている活動の割合が高い結果となった。児童生徒が SDGs の 17 の目標やその内容について理解できているか確認したいところだが、残念ながら今回のアンケート結果からは

### 3 校種毎の調査結果に基づいた考察【特別支援学校】

明らかにはできなかった。しかし、児童生徒の実態に合わせて、児童生徒自身が「生活の中で行っていることが、地球のためになっている。」という考え方ができるようになることが今後の指導の目標となってくるだろう。

特別支援学校（視聴肢病）と特別支援学校（知的）での回答に違いが見られた項目がある。**〈児童・生徒(中高のみ)〉質問 7「次の言葉で、聞いたことのあるものはありますか。」(あてはまるものをすべて選択)**の結果を【図 4-2-3】に示す。この結果から、それぞれの障害種の児童生徒の生活に関係する身近な人やメディアから見聞きしたと思われる言葉が挙げられている。「地球温暖化」や「リサイクル」、「バリアフリー」など学校教育の場面でも使用頻度のありそうな言葉もあるが、例えば、「サステイナブル」は一見すると難しい言葉だが、教育テレビで扱われていることから、児童生徒は身近な言葉として捉えている。前述のとおり、SDGs



【図 4-2-2】

	視覚障害者、聴覚障害者、肢体不自由者、病弱者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校	知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校
1	地球温暖化	地球温暖化 サステイナブル
2	平和	リサイクル
3	バリアフリー	フードロス

【図 4-2-3】

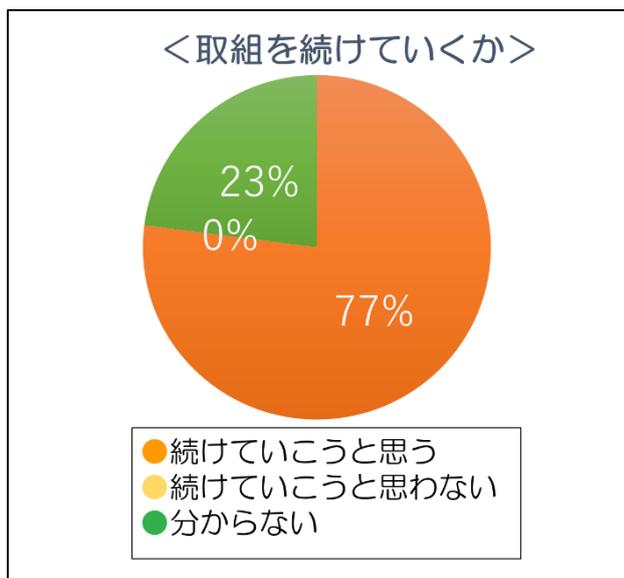
に関する言葉の認知は学校以外の場所での影響も大きく関係していると思われる。

〈児童・生徒〉(小)設問 5、(中高)設問 7「SDGs の取り組みをこれからも続けていこうと思いますか。」の結果を【図 4-2-4】に、〈児童・生徒〉(中高のみ)設問 11「SDGs に取り組むことで、未来はよくなると思いますか。」の結果を【図 4-2-5】にそれぞれ示す。これらの回答結果には障害種の違いによる差異は見られなかった。これらの結果から SDGs について考えていくことや、今後も取組を継続していくことへの必要性を感じていることが読み取れる。また、将来に何か良い影響があるという考えに結び付くと思われる前向きな回答が多かった。

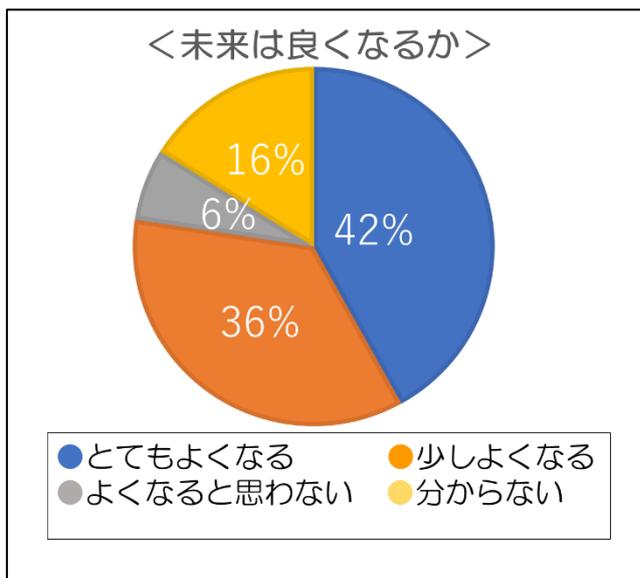
ここまでのアンケート結果の分析から、児童生徒の「SDGs」という言葉の意味の理解は定かではないが、児童生徒自身が生活の中で行っている活動の大切さや重要性を感じていることが分かる。

### 3 校種毎の調査結果に基づいた考察【特別支援学校】

課題点としては、生活の中では経験することが少ない活動に関して、興味や関心が薄いため、活動に結び付きにくいということが挙げられる。



【図 4-2-4】



【図 4-2-5】

### 3 今後学校現場が目指すこと

まずは教員が SDGs に目を向けて、SDGs に関する正しい知識と高い意識をもつことで、学校行事や授業の中で意図的に学習内容と SDGs を関連付けることができると考えられる。つまり、新しいことを取り入れるのではなく、既存の教育活動を SDGs と関連付けて行い、生活に結び付いた実践的な活動を継続して行うことが大切である。これらの実践により、児童生徒自身に児童生徒の実態に合った SDGs に関する活動が身に付くことを目指していく。

最終的な目標としては、SDGs の概念からの学習をきっかけとするのではなく、生活に即した経験を基に、児童生徒自身が SDGs の意味を理解し、自ら意識して行動ができる力を育成していきたい。これは、新学習指導要領で示されている「自主的・主体的」や「生きる力」の育成にもつながっていく。つまり、児童生徒自身が SDGs を自分事として捉え、「これからの地球をよくするためには、今自分がやっている活動、やろうとしている活動が大切である」ことに気付き、「これからも続けていこう」、「自分にできることをやろう」という気持ちをもつことが大切だと考える。

しかし、SDGs の意味の理解や自ら行動しようとする力は、特別支援学校の児童生徒にとっては発展的、応用的な力になるため、児童生徒の実態や発達段階などを考慮しながら段階的に取り組んでいくことが必須である。